

中央アンデス農耕文化論 : とくに高地部を中心として

著者	山本 紀夫
学位授与年月日	2014-11-26
URL	http://doi.org/10.15083/00007551

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 山本紀夫

山本紀夫氏の博士号請求論文「中央アンデス農耕文化論―特に高地部を中心として―」は、民族学を中心としながらも農学・生態学・地理学・考古学・歴史民族学の研究成果を取り入れて、中央アンデスにおける農耕文化の特質を明らかにしようとする論文であり、山本氏の長年にわたる中央アンデス調査研究の集大成といえるものである。

論文は序章・終章を含めて全10章からなる。序章においては、トウモロコシ栽培だけを重視して、ジャガイモなどの根菜類栽培を等閑視してきた従来の中央アンデス農耕文化研究の問題点を指摘したうえで、クロニカと呼ばれているスペイン人征服者などが残した文字記録と筆者のフィールドワークの結果を結びつける研究方向が示されている。

第1章「中央アンデスの環境」と第2章「中央アンデスの栽培植物と家畜」は、中央アンデス地帯の環境と農業・牧畜に関する概説部分であり、長大なアンデス山脈地帯において筆者が調査地域として設定した中央アンデスの特徴と、さまざまな根菜類とラクダ科動物のドメスティケーションの起源地となった中央アンデスの農耕と牧畜の特異な性格が示されている。

第3章「狩猟採集から食糧生産へ」、第4章「開花する農耕文化―農耕の発達―」、第5章「インカ帝国の農耕文化―主としてクロニカ資料の分析から―」は、農業発生以前の時代からスペインによる征服直前のインカ期までの時間的経緯を、ジャガイモの栽培を中心として描いた部分である。第3章で注目すべき成果は、ジャガイモの栽培化がラクダ科動物及び家畜化と密接な関係をもつ可能性を指摘したことである。すなわち、野生ラクダ科動物による環境の攪乱（糞場における雑草性ジャガイモの優越）、家畜化された野生ラクダ科動物の糞の肥料としての利用である。そして第4章において穀物に比べて遺物の形で残りにくいイモ類の重要性が考古学においてこれまで軽視されてきたことを指摘し、第5章においてはクロニカ資料に基づいて、ジャガイモが主食として人々の食糧基盤を形成したのに対し、トウモロコシが儀礼的・宗教的色彩の強い食物であったことを指摘して、二つの作物の違いを明らかにしている。

第6章「農牧民の民族誌的研究―食糧の生産と消費を中心に―」、第7章「掘り棒から踏み鋤へ―農具に関する民族考古学的研究―」、第8章「イモ類の加工技術に関する民族植物学的研究―」は、筆者のフィールドワークの成果に大きく依拠する「農牧生産」「農具」「加工技術」に関する実証的な分析からなる部分である。第6章では筆者が調査したペルー共和国のマルカパタという集落における農牧生産の詳細が語られ、第7章では先スペイン期

アンデス地域において最も進んだ農具であった踏み鋤がジャガイモ生産と密接な関係をもっていたこと、そして第8章では高地部におけるジャガイモの生産と保存を可能にした加工技術の詳細が語られている。

終章は、それまでの議論を受けて、中央アンデス高地部ではジャガイモ栽培が卓越する根菜農耕が住民の食糧基盤を形成しており、この農耕にはラクダ科動物の飼育・利用も密接に関連していることを指摘する。そして、ジャガイモを中心とする根菜、踏み鋤などの農具、毒抜きや凍結乾燥といった農業生産物加工法は、分布域が重なりあっており、中央アンデスにおいて「根菜農耕文化圏」が成立することを主張している。

この論文は、フィールドワークによる詳細な民族学研究に基礎を置きながら、農学という学問分野を身につけた筆者が、アンデス研究においてこれまでなかった独自の農耕文化論を打ち立てたことが、審査員全員から高い評価を受けた。また、ジャガイモ栽培とラクダ科動物の飼育の連関が中央アンデス独自の農牧複合体制を作り上げたという指摘も全員の賛同を得た。ジャガイモ栽培と農具・加工技術の関連についての詳細な記述もまた高く評価された部分である。そしてまた、穀物に対する注目に対して根菜類の重要性が軽視されてきた文化論の偏りを指摘した点や、東南アジアと比較して中央アンデスの農耕文化がより洗練されていることを明らかにした点を評価する審査員の意見もあった。

しかし問題点が指摘されなかったわけではない。論文の記述がインカ期に関する記述から現在の中央アンデス社会への記述にとぶために、あたかもインカ期と現在が連結しているかのように見えること、すなわち植民地に関する考察が欠落しており、歴史性についての認識が不足していること、また中央アンデスをひとつの文化圏として設定するためには、その内部の地域的変異に関する考察の不足や、文明論として練り上げきれていない点が見えるといった指摘も、審査員によって行なわれた。

しかし、指摘された問題点も本論文の学術的貢献にとって大きな瑕疵となるものではなく、本審査委員会は、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定する。